

博士学位論文要旨集

内容の要旨および審査の結果の要旨

第 18 集

平成26年3月

二松學舎大学

はしがき

この冊子は、学位規則（昭和28年4月1日文部省令第9号）第8条の規程による公表を目的として、平成25年度本学において博士の学位を授与した者の、論文内容の要旨及び論文審査結果の要旨を収録したものである。

目次

学位の種類等	学位番号	氏名	学位論文題目	頁
博士（文学）	乙第10号	亀田 一邦	防長儒医の研究	1
博士（文学）	乙第11号	江藤 茂博	二〇世紀文芸のメディア変換と流通の諸相 — 物語の構造分析理論と 市場性獲得の構図 —	7
博士（文学）	甲第49号	具 香	近世開版古往来の研究 — 『新撰遊覚往来』をめぐって —	15

博士学位（乙）論文審査報告

題	目：	防長儒医の研究	
氏	名：	亀田 一邦	
論文審査委員：	主査	牧角 悦子	本学文学部教授
	副査	町 泉寿郎	本学文学部准教授
	副査	小曾戸 洋	北里大学東洋医学総合研究所教授
	副査	磯 水絵	本学文学部教授

論文内容の要旨

本論 『幕末防長儒医の研究』（知泉書館 二〇〇六年 刊行）

副論 『防長儒医の研究』 ・「終わりに」

*総量：四百字詰め原稿用紙八五〇枚換算

亀田氏からの博士学位請求論文の審査は、上記二冊の論考集を総合して、『防長儒医の研究』と題する一連の論考に対して行われた。

本論考は、幕末を中心とした江戸期の、防長（周防・長門）という地域の儒医を対象として、儒医と呼ばれる人士の多様な生きざまを描くことによって、近世後期の医学史の補填を目指し、かつ儒医という存在の特性を、個別に具体的に示すものである。

本論考の構成は以下の通りである。

『幕末防長儒医の研究』

第一編 坂家連璧考

- ・ 久坂玄瑞の神医説—安政における起医の決心
- ・ 京坂遊学期における久坂玄機の交友関係について

第二編 防長王学の展開

- ・ 幕末長州支藩の王学派台頭に関する俯瞰的考察—吉村秋陽とその門人の軌跡を軸として
- ・ 高杉東行の王学信奉に関する覚書

第三編 医侠松本濤庵の研究

- ・ 長府藩医松本濤庵に関する若干の考察

- ・ 松本濤庵の医事——古谷道庵との交渉を中心として

第四編 下関と広瀬旭荘——通儒の悲劇

- ・ 嘉永四年広瀬旭荘の長府娶嫁及び藩儒招聘に関する一考察
- ・ 広瀬旭荘の赤関厄難について——『日間瑣事備忘録』に見る婚家当主清水麻之丞との紛擾顛末

第五編 下関出身の草莽儒医とその活躍

- ・ 湖南の儒医中村徳寅について
- ・ 福地苟庵小伝——長府に生まれた桜痴居士の父
- ・ 石橋陳人『茂園残話』の研究——福地苟庵の著述をめぐって
- ・ 沈浪仙の和詩収集と長崎文人——福地苟庵『蕪稿』とその周辺

『防長儒医の研究』（副論）

- 一、18世紀の下関医界と香月牛山門の三医について
- 二、中村徳美とその著述について
- 三、小石元俊の水軍術伝授とその周辺
- 四、高杉晋作の主治医石田精一について——変革期草医の「雅」と「俠」——
- 五、吉田有秋の継父田三畝に関する考察——長崎・久留米・下関での足跡を中心として——
- 六、下関開業時代における岡研介の事績及び寄寓背景に関する考察——本州西端の海港に見る文政末蘭学の展開——

終わりに

審査論文の中心は、『幕末防長儒医の研究』である。以下にその概略を示す。

第一編 坂家連璧考

久坂玄瑞・玄機兄弟の事跡と思想の変遷を追ったもの。「久坂玄瑞の神医説—安政における起医の決心」では、欧米医政の先進性に明るかった吉田松陰、および兄玄機の抛業立志論や厚生思想から影響を受けた玄瑞の医家立身について、その経緯と思想背景を明らかにし、「京坂遊学期における久坂玄機の交友関係について」では、久坂玄機の京阪遊学機の交友を跡付けつつ、玄機が適塾ゆかりの儒医や坂谷朗盧グループ、広瀬旭荘グループなどと広く交友した詳細を、独自の医政論の展開との関連で論じる。

第二編 防長王学の展開

王学（陽明学）が幕末維新期の改革派知識人に大きな影響を与えたことは周知の事実であるが、防長藩学における王学は低調だと見られていた。しかし宗藩がモデル化した朱子学一尊に対し、各支藩はそれぞれ文教の独立を画し、教育改革に乗り出していた。その中心に存在した幕末屈指の王学者吉村秋陽の各支藩への影響を俯瞰した「幕末長州支藩の王

学派台頭に関する俯瞰的考察—吉村秋陽とその門人の軌跡を軸として」、およびその末端に連なる高杉晋作の人格思想形成について論じた「高杉東行の王学信奉に関する覚書」からなる。特に高杉について論者は著作を別に持つが、共通して強調されるのが、王陽明——李卓吾——吉田松陰と続く「狂」の精神の高杉への継承である。幕末における王学の浸透と改革思想という大きな問題に繋がる重要な事跡を提供している。

第三編 医侠松本濤庵の研究

幕藩期、世俗的に卑しまれていた「医」という存在が、西洋医学と東洋医学との葛藤や宗藩支藩での政治思想の矛盾などを背景に、特に長府下関にあっては一種独特の先進知識人的存在になっていたことを「医侠」という呼び名のもとで詳解する。「長府藩医松本濤庵に関する若干の考察」は松本濤庵の事跡の発掘であり、「松本濤庵の医事——古谷道庵との交渉を中心として」は古谷道庵との交流を通して浮き彫りになる蘭方医としての濤庵の姿である。特に種痘の実践や広瀬旭荘との関わりには、医家のネットワークを考える上での重要な示唆がある。

第四編 下関と広瀬旭荘——通儒の悲劇

広瀬旭荘といえば鎮西の巨匠、一代の通儒として高名であるが、その娶嫁と訴訟という私生活での事件を巡って、錯綜する周囲の思惑とその背景を炙り出した評伝である。「嘉永四年広瀬旭荘の長府娶嫁及び藩儒招聘に関する一考察」では、広瀬旭荘が長府藩から第四妻を迎えた経緯と、そこに広瀬旭荘を藩儒に迎え、藩教学の一新を図ろうとした長府藩における改革派の策動があったことを明らかにし、「広瀬旭荘の赤関厄難について——『日間瑣事備忘録』に見る婚家当主清水麻之丞との紛擾顛末」は、妻の実家とのトラブルに悩まされる晩年の広瀬旭荘の人間的な苦悩の跡を追ったもの。

第五編 下関出身の草莽儒医とその活躍

ここでは、下関出身の民間医家として、これまでほぼ草間に埋もれていた人士の資料を発掘し評伝する。「湖南の儒医中村徳寅について」は、下関に商人の子として生まれ、幕末維新期に京都尊攘派の一角を占め、また詩文家、教育者として実績を残した中村徳寅の事跡を追うもの。「福地苟庵小伝——長府に生まれた桜痴居士の父」は、明治期の政界・官界・言論界に活躍した福地源一郎（桜痴）の父である福地苟庵の評伝。長府に生まれ上阪し長崎に流寓する中で、儒と医との狭間で苦悩した苟庵は、シーボルトとも関わり種痘を積極的に推奨し、医家として活躍するが、実践活学として政治への参画ができなかったことを悔み続けた。その苟庵の著述に係る文献の発掘が「石橋陳人『茂園残話』の研究——福地苟庵の著述をめぐって」である。徳富蘇峰の旧蔵書所収の『茂園残話』こそ苟庵の著作であり、そこには深い学問修養に裏付けされつつも新しい歴史感覚と実践論と合理精神がうかがい知れることを詳解する。「沈浪仙の和詩収集と長崎文人——福地苟庵『蕪稿』とその周辺」は、中国浙江の詩人沈浪仙と、福地苟庵を含む日本文人たちの幕末長崎における詩文交流の実態を解明したもの。

次に、副論である『防長儒医の研究』の概要を示す。

ここでは幕末に限らず近世後期における防長の儒医を対象に、それぞれの事跡の発掘が試みられている。「18世紀の下関医界と香月牛山門の三医について」は、18世紀の下関医界においては香月牛山の門下である藤江玄雄・藤井問庵・永富友庵の三人が流行医、藩医として活躍したが、18世紀後期になると、友庵の息子である永富独嘯庵とその系脈に連なる長府医学の影響が顕著になることを証明する。「中村徳美とその著述について」は、中村徳寅の父である徳美について埋もれた伝記資料を発掘したもの。「小石元俊の水軍術伝授とその周辺」は、関西蘭医学の主唱者として知られる小石元俊の医兵同理論の形成を論じたもの。萩藩における水軍小吏出身者の儒官としての躍進を知った元俊が、防州三田尻で水軍術の皆伝を受けたことに、医学と兵法とを同時に感得する合理精神を見出した論である。「高杉晋作の主治医石田精一について——変革期草医の「雅」と「侠」——」は、高杉晋作の晩年の主治医であった石田精一の医術と文雅を語り、政治色濃厚な侠医としての石田の姿を描いたもの。「吉田有秋の継父田三畝に関する考察——長崎・久留米・下関での足跡を中心として——」は、緒方洪庵、広瀬旭荘に愛された門人吉田有秋と、その義父吉田義一郎（田三畝）の足跡を追うもの。咸宜園が西方士人の教育の本拠地であったこと、そこから医師・経世家、写真家など様々な人士が生まれ、また各地でそれぞれに活躍する知的ネットワークを展開する。また、田三畝が下関で開業するに当たって、地元の有力者からの助成を受けたという指摘は重要である。「下関開業時代における岡研介の事績及び寄寓背景に関する考察——本州西端の海港に見る文政末蘭学の展開——」は、高野長英と並んでシーボルト門下の俊英であった岡研介の下関開業期の事跡を追ったもの。下関の蘭学は岡研介によって完成を見たことを論じる一方で、縁故関係を通じて馬関の富商が研介を支援したことも重要な指摘である。

終わりに

ここでは、上記二書の全体を総括し、各論での解明点を整理し、現地点での結論と問題点を分析する。

まず儒医の定義についてである。中国学的視点から儒医の語を確認した上で、日本における「儒医」の語の解釈の歴史を概観し、特に近世後期における「儒医」を、「儒教の修己治人の政治道徳論を信奉し、実現を目指した憂国医家」と定義する。また、「分析視角としての『儒医』について」では、「伝統と近代の狭間で苦しんだ知識人の一角を占める防長の『儒医』」に焦点を当てることの有効性を説く。

最後に結論として、まず本論の目的が、「近世防長における、(1) 後世方派から古方派へ、(2) 漢方医学から蘭方医学へ、(3) 幕末維新、という三つの変革期に生きた「儒医」の事績を探り、彼らがいかにして新時代への対応を模索したかを解明すること」にあり、別言すれば、伝統から近代へと向かおうとする様々な転換過程における、防長の伝統的知識人の多様な思惟構造や行動様式を明らかにする試みでもあった。」とする。

また、具体的成果として以下の五点を挙げる

第一に、幕末維新期の長州藩（萩宗藩、及び長府、徳山、清末、岩国の支藩）が躍進する一因に、陽明学を積極的に受容して、変革のエネルギーとした二つの王学徒グループの存在があった点。第二に、幕末防長の開明派医家は、早く漢医学の限界、欧米の医療制度の先進性を察知し、その導入を急務とする意見を持った点。第三に、幕末防長の「儒医」中には、政事に強い関心を抱くものが少なからずあったという点。第四に、防長に展開した西国知識人の有力ネットワークの形成過程とその広がりが明らかになった点。第五に、海港下関の知識人の活動に焦点をあて、近世下関という知的空間の様相を照出した点である。

以上、防長において「儒医」という存在が、国内外の時勢に照応する現実認識に立脚し、伝統的思惟の中に近代的要素を選択し、伝統的知識人の枠に安住することなく、主体的に新たな学問・思想の吸収に励み、自ら行動することに意義を見出だし、新時代への展望を開拓した人々であったと結論する。

論文審査の結果の要旨

論者の目指すところは、地方医学史の構築である。従来、防長の医学史に関しては、田中助一氏（故人）の『防長医学史』が唯一であり、田中氏の在住した萩を中心としたもので、文化交流の拠点であった赤関（下関）における儒医についてはほとんど欠落していたとあってよい。論者は下関在住の利点を生かして、丹念に資料を蒐集し、当地の儒医の様相を広い観点から明らかにした点、特に下関を中心とした幕末医学史の端緒を開いた点において、医学史上の画期的業績と評価するに足る。

また、「儒医」という視点を掲げ、久坂玄瑞・久坂玄機・吉村秋陽・高杉東行・松本濤庵・広瀬旭荘・中村徳寅・福地苟庵（石橋陳人）・中村徳美・小石元俊・吉田有秋・岡研介の事跡と思想、そして実践に対して時代的意味を見出そうとしていることは、思想史的意義も有する。近代前夜の時期に、防長において儒医なる存在がいかなる知的営為を展開したのか、それは、伝統と近代、中央と地方、そして思想と実践という多面的な思想史上の大きな問題を含むからである。医療という実践を目指すことと儒者であろうとすることが、伝統的な知的営為の展開を離れて新たな視点を獲得していく過程が、それぞれの儒医の思想と実践を踏まえて提示されるのである。その意味で、儒医という視点は、医学史の範囲を超えて思想史としての展開にもつながる重要な視点だと言えよう。

このように、医学史の補填を目指して提示された本論は、同時に思想史的問題へも発展する要素を多く内包するが、一つの研究成果として見た場合に最も評価すべき点は、その評伝としての価値にあらう。近世後期を生きた有名無名の人士の事跡が、かなう限りの資料の博覧に裏付けされつつ詳細に提示される。資料の渉猟は日記・書簡から詩文、更には碑文・銘文にまで至り、文字どおり埋もれてしまいかねない草莽の墓地からも収集されて

いる。そして当時の文献を読むには広い中国学の基礎知識が必要である。漢文文献を正確に読むことからしか分からない儒医たちの著述や事跡の記録を、論者自身の中国学の素養に基づきつつ読み解いたことも、評価すべき点である。

一方、問題点として指摘すべき事項も幾つか存在する。まず一つは、引用した資料のテキストとしての扱いについてである。特に墓誌・墓銘などの石刻資料、また書簡や日記などは、生の史料であると同時に書き手の立場や意図を反映する。称揚や賛美の辞を文字どおり受け止めることには慎重であるべきであろう。また、漢詩作品を多く引用したことは本論の価値ではあるが、しかし漢詩は文芸であるが故の難解さを持つ。解釈においてまま誤読が見られる点については今後の修正を求めたい。二つ目は防長という地域の客観視である。防長地域に限った研究であることから、明治維新を成功させた長州という勝者側の史観に引きずられている点はないかという疑問は当然生じうる。ご当地自慢にならないためには、中央との関連や他地域との比較などによって、その特性がより明確になるはずである。論者の言う防長の先進性を客観的に証明するためには、今後より広い視野からの考察を必要としよう。

このような問題点を含みながら、しかし本論考の持つ総合的な価値は十分評価に値する。個別の事跡を丹念に手繰ることから見えてくる日本近代前夜の学術と、それを支えた学問の在り様、そして一見細部にみえる事項から大局につながる大きな展開を示唆する視点は、評伝としての本論考の価値を大きく高めている。

地道な調査と丹念な資料解読を通して、変動の時代を生きた儒医たちの事績を、大きな近代史のなかに位置づけようと試みた労作であると評価する。

以上のような理由により、本論が「博士（文学）」（乙）の学位に相当することを、審査員一致で認定するものである。

博士学位論文審査報告

題 目： 二〇世紀文芸のメディア変換と流通の諸相
——物語の構造分析理論と市場性獲得の構図——

氏 名： 江藤 茂博

論文審査委員： 主査 稲田 篤信 本学文学部教授
副査 山口 直孝 本学文学部教授
副査 岩佐 壮四郎 関東学院大学教授
副査 家井 眞 本学文学部教授

論文内容の要旨

本論文は19世紀後半から20世紀の文芸、およびその映像化された作品を事例研究の対象に選び、テキスト論の立場に立って言語表現と映像表現を物語テキストとして同じ位相で分析の対象として「メディアミクス」（メディアの接合や変換）の諸相の分析を行い、それぞれのテキストの特性と差異、物語再構築の力学を論究したものである。

また、本論文では文芸や映像の作品を資本主義社会における商品の制作から流通、受容の一連の関連性を表象するモノと考え、「パッケージ」という用語を用いて概念化している。このことによって、言語表現同様、映像表現においても、個人消費のパッケージメディアとして対象化できるという立場から個別事例を論じている。

本論文の構成は以下の通りである。

本論編

序論

趣意

第一部 言語表現と映像表現

目次

はじめに

第一章 映像論の試み——テキスト・平面・時間

第二章 喜劇論の試み——チャップリン『街の灯』論

第三章 映像史の試み——メディアの革命

第四章 映画を「読む」ということ——『打ち上げ花火、下から見るか？横から見るか？』（岩井俊二）論

第五章 「映像を読む」ための講義

第六章 大林宣彦の映画を読む——『時をかける少女』と『異人たちとの夏』

第七章 ウディ・アレンの映画を読む——『アニー・ホール』、『スターダスト・メモリー』、そして『カイロの紫のバラ』

第八章 芥川龍之介の小説を読む——『羅生門』と『地獄変』

結び

第二部 筒井康隆『時をかける少女』とその映像化

目次

はじめに

第一章 『時をかける少女』の「小説論」——小説の構造と解説

第二章 『時をかける少女』の「SF論」——SF文学史の系譜

第三章 『時をかける少女』の「読者論」——六〇年代の文化誌

第四章 『時をかける少女』の「続編論」——NHK少年ドラマシリーズ『タイム・トラベラー』

第五章 『時をかける少女』の「文化論」——角川映画という現象

第六章 『時をかける少女』の「構造論」——小説・映画・テレビドラマの物語構造

第七章 『時をかける少女』の「語り論」——小説と映画のナラトロジー

第八章 『時をかける少女』の「少女論」——少女へのまなざし

第九章 『時をかける少女』の「脱構築」——テキストの解体

第十章 『時をかける少女』の「メディアミクス」

結び

第三部 横溝正史『金田一耕助シリーズ』の物語再構築

目次

はじめに

第一章 メディアミクスの出発

第二章 『幽霊男』の映像化とメディアミクス

第三章 横溝正史の小説の観光メディア化

結び

第四部 広がる商品としての表現メディア

目次

はじめに

第一章 オタク文化を歩く

第二章 「ニセモノ」ビジネスの光景

第三章 オタク文化と複製の物語

第四章 資料

結び

結論

主要参考文献目録および初出対照著作

資料編（別冊）

序論

序論において、論者は19世紀後半以降の近代文学における文芸の商品化と市場形成、文芸ジャーナリズムの成立に言及し、写真と映画の前史、トーキー映画、テレビジョンに至る映像史を略述し、テキスト論的な立場に立って、小説と映画・テレビドラマなど異なる表現メディアから物語性の特質と差異を取り出すという本論文の立場を述べている。

趣意

論者は文学研究と国語教育によって支持され再生産されてきたハイカルチャーとしての文芸、大学の大衆化や出版ジャーナリズムによる文芸の商品展開、メディアミクスなど、20世紀の「文芸メディア」をめぐる歴史的な経緯を概観し、本論文の関心は総体としての「文芸メディア」の生成と推移にあると述べている。

第一部

第一章 映像論の試み——テキスト・平面・時間

本章では映画は言語やフィルム、写真といった形態的な差異を超えた意味生成の場所として、テキストとして解読することが出来るというロラン・バルトの記号論的な方法論に立脚し、映像テキストは、同時に存在する複数の記号を解読することで意味の連鎖の生成が成立するという構造を、「平面」と「今」の現前化といった時空の意味論の中で論じている。

第二章 喜劇論の試み——チャップリン『街の灯』論

本章ではチャップリン『街の灯』は、映像テキストとしては、観客が登場人物の浮浪者と紳士二役を演じる主人公に向ける視線の二重性、すなわち、「期待される必然的な行為」と「期待される逸脱した行為」のズレや収斂の中に喜劇性が発生するという構造を持つとして、チャップリンの映画はこうしたパントマイムによる「ドタバタ喜劇」の「視覚的なコード」に比重を置くと同時に、個別文化的コードに依存する「物語系のコード」の解読も求められるという点で、サイレントとトーキーの狭間にある作品であると論じている。

第三章 映像史の試み——メディアの革命

本章では20世紀映像メディアの歴史を主にルドルフ・アンハイムなどの西洋映画史、マクルーハン、ベンヤミンなどのメディア論を援用して論じている。映像を観客の中に生起する言語芸術と同値性を持つ意味作用として捉えることや、映画を複製芸術としての商品、映画館、監督、観客の制度性を神無き宗教性のメタファーとして捉えるなど、近代芸術の特質を論じている。

第四章 映画を「読む」ということ——『打ち上げ花火、下から見るか？横から見るか？』（岩井俊二）論

本章では、1995年8月公開・岩井俊二脚本・監督の映画『打ち上げ花火、下から見るか？横から見るか？』を取り上げ、本作品は、登場人物の生きる物語現実と、「もしも」という仮想の物語

の二重の世界を生きる設定になっていることを指摘し、映画の現実把握の仕組みは、様々な可能体の中から選択されて一つの姿をとっているが、背後の実現されなかった現実を含む総体が物語化されていると論じる。

第五章 「映像を読む」ための講義

本章では、岩井俊二監督『Love Letter』と尾瀬あきら作の漫画『夏子の酒』の二つの作品を取り上げ、両者はメディアが異なるものの、共通して、女性像の中に死者の意思を継承し、死者に語りかける巫女的な女性の物語があることを指摘し、現代の表層に潜む前近代性を論じることで、現代メディア作品の特質を浮き彫りにしている。

第六章 大林宣彦の映画を読む——『時をかける少女』と『異人たちとの夏』

本章では、大林宣彦監督の映画『時をかける少女』（1983）と『異人たちとの夏』（1988）を記号論的な立場から、物語の空間と時間、画面に示される文字や映像内映像、音、語り手の位相など、観客が遭遇する混乱と意味の形成に制作者の戦略があると論じている。前者からは主人公が2人の男の間で探り当てていく「真実の愛」の物語を、後者からは都市空間の中の異界訪問的な神話世界の物語を読み込んでいる。

第七章 ウディ・アレンの映画を読む——『アニー・ホール』、『スターダスト・メモリー』、そして『カイロの紫のバラ』

本章はウディ・アレンの映画を取り上げて、物語テキストとしての語りの構造を論じている。『アニー・ホール』（1977）は内容全体を観客に示していく語り手の語りを読んでいく受け手と、映像上の実体的な語り手の語りを読む受け手の二重化された受け手を創出している。『スターダスト・メモリー』（1980）は、映画の中に3本の映画と登場人物の夢や回想、現実といった物語が入れ子型の構造で収まっている。『カイロの紫のバラ』（1985）は主人公の観る映画の中からその登場人物が抜け出てきて虚実の空間を越境する。

第八章 芥川龍之介の小説を読む——『羅生門』と『地獄変』

本章は芥川龍之介の『羅生門』（1915）と『地獄変』（1918）を取りあげて、登場人物である語り手と語られた物語世界の内容との関連性、各存在が支配している領域の位相性を吟味し、前者は作中に現れる語り手と「作者」、登場人物である下人の行為や心理、形象が作品の重層性を作っていること、後者は新聞小説というメディアの特質と相俟って、読者を特権的に支配する語り手として成立していることを論じる。

第二部 筒井康隆『時をかける少女』とその映像化

第一章 『時をかける少女』の「小説論」——小説の構造と解説

本作は1965年（昭和40年）の学習研究社発行「中三コース」11号からの連載小説が初出であるが、本章ではこうした成立の事情を視野に入れながら、主人公（芳山和子）が最初に遭遇する放課後の理科実験室小説の場面などを取り上げて、小説的時間、場所、主題性を論じている。未来から来た少年である深町一夫への無自覚の思慕の情は、手に入れると同時に消さなければならない性

格を持つものと分析し、伝統的なプラトニックラブの系譜にあるものと論じている。

第二章 『時をかける少女』の「SF論」——SF文学史の系譜

本作の登場人物深町一夫が属しているのは西暦 2660 年の未来社会であるが、本章ではその未来性が小説や映画が発表された当時の社会的危機感を反映した現在性を持っていると論じている。西暦 2660 年はヒューゴー・ガーンズバックの SF 小説『ラルフー二四C四一+』が設定した舞台の年であることを紹介し、あわせて本作の位置を H・G・ウェルズ『タイム・マシン』（1895）や日本 SF 小説史の中で略述している。

第三章 『時をかける少女』の「読者論」——六〇年代の文化誌

本章では本作の深町一夫の語る、寝ている間に勉強が進むという未来社会の睡眠教育、また主人公の少女を理系希望とする造型などに、発表当時の受験生の夢が籠められていると指摘している。また本作の受容の背景として、往復書簡集『愛と死を見つめて』（1963）が巻き起こした純愛ブーム、売春禁止法の公布施行から出現する女性の「商品」性の変質、出版界における SF 小説の隆盛など、社会的文化的背景を指摘している。

第四章 『時をかける少女』の「続編論」——NHK 少年ドラマシリーズ『タイム・トラベラー』

『時をかける少女』の続編的作品に、石山透脚本のテレビドラマ『タイム・トラベラー』、『続・タイム・トラベラー』、後者を石山自身が小説化した『続・時をかける少女』がある。本章では原作の 6 話の全体の主題と各話の相互の続き方の戦略を「大きな仕掛け」、「小さな仕掛け」と名付けて、石山作の続編と比較し、また、主人公和子の純愛物語の質的な位相を論じている。

第五章 『時をかける少女』の「文化論」——角川映画という現象

本章では 1960 年（昭和 35 年）以後の日本映画界の動向を概観し、特に 1975 年以降、出版社であった角川が映画業界に参入して以降の代表的な作品や興行成績などの分析を通じて、映像・音楽・言語の流通の相乗効果（原作、キャッチコピーの宣伝、映画音楽、アイドルの物語性）を狙った角川映画の新機軸の戦略を指摘している。

第六章 『時をかける少女』の「構造論」——小説・映画・テレビドラマの物語構造

本章では筒井康隆の小説（1965-66）、石山透の続編小説（1973?）、石山透による脚本（1972）、フジテレビ制作の 2 作品（1985,1994）、角川映画の 2 作品（1983,1997）を取り上げて、A・J・グレマスの物語構造分析のモデルを用いて、登場人物深町一夫を論じ、各作品構造の特質の異同を分析している。ここで明らかになるのは、一夫の未来への帰還に対して補助者・反対者のいずれの立場に立つとしても、和子と一夫の恋愛譚の構造は各作品ともに一致していることであると述べている。

第七章 『時をかける少女』の「語り論」——小説と映画のナラトロジー

本章では芥川龍之介の『羅生門』及び『地獄変』、『藪の中』、『時をかける少女』の小説と映画、テレビドラマを取り上げて、それぞれの語りの機制を論じている。小説の場合、物語の外部、内部の別はあっても、人格化された語り手として登場し、それを「内包された作者」（ウエイン・C・

ブース)が統括する。一方、テレビドラマや映画では、小説とは異なる多様なコミュニケーション手段の合成物を束ねる「映画的語り手」(シーモア・チャットマン)が作品ごとに異なる方法で語っていると論じている。

第八章 『時をかける少女』の「少女論」——少女へのまなざし

本章は原作を恋愛小説として読んだとき、主人公和子は男性の性的欲望のジェンダー的視点で造形された近代的な「少女」の物語であるとし、成長する主人公と受容する時代相を略述しながら各作品がどのように造形されているかを論じている。

第九章 『時をかける少女』の「脱構築」——テキストの解体

原作からテレビドラマ・映画の一連の制作を先行するテキストの解説の連鎖とした場合、読者もその連鎖の論理に呪縛されているとし、デリダやカラーの脱構築の理論を援用しながら、内田有紀主演のドラマは先行テキストの破壊のドラマ性を持つと論じている。

第十章 『時をかける少女』の「メディアミクス」

本章では1965年の原作小説の出現以来半世紀にわたる展開を、1、原作のリリズムを活かした映像化の方向性を求める時期、2、アイドルによる映像化を追求する時期、3、物語主義的なメディアミクス戦略に支えられた二次創作的世界を持つ時期、の3期に分けて、映画、テレビ、小説、漫画、アニメの作品群を作品主題、主人公のキャラクター、物語の枠組みなどの指標を光源にして概観している。

第三部 横溝正史『金田一耕助シリーズ』の物語再構築

第一章 メディアミクスの出発

本章では、1911年浅草金龍館で上演されたフランス映画『ジゴマ』が作ったブームが映像と活字の相乗効果で出現したメディアミクス現象であるという永嶺重敏の指摘を受けて、江戸川乱歩の『ジゴマ』体験、後続の横溝正史の同時代性を指摘し、後の角川映画の横溝作品のメディアミクス戦略の原風景をここに見ている。

第二章 横溝正史『幽霊男』の映像化とメディアミクス

本章では、横溝正史『幽霊男』の小説・映画に描かれた東京が、前者は特定の場所に結びつかない市街地全体の東京のエロチシズムが浮かび上がるように書かれているのに対して、後者は東京のランドマークを点描し、犯罪都市東京のエログロ・ナンセンスの猟奇性が強調されるものになっているという変容を述べている。

第三章 横溝正史の小説の観光メディア化

本章では、小説・ドラマ、アニメなどの作品を資源とする観光は、作品の追体験的な物語テキストの生成であるという立場から、論者が参加した倉敷市観光課主催のイベント「巡・金田一耕助の小径」(平成25年1月26日・27日)の報告と『時をかける少女』、『金田一耕助シリーズ』の獲得する市場性の質的相違を論じている。これは作品のSF的な未来に支配される現在、過去に支配さ

れる事件の謎解きといったそれぞれの物語構造に由来する質的相違という意味で、メディア変換されたテキストの位相と同じであると述べる。

第四部 広がる商品としての表現メディア

第一章 オタク文化を歩く

1960年代以降の日本のマンガ・アニメーション・コンピューターゲーム文化はアメリカを始めとして、欧米・東アジアといった世界的な地域に浸透し、1990年代以降、一部のマニア（オタク）文化としても広く知られるようになった。本章はシンボリックな聖地である秋葉原の江戸から東京に至るオタク文化のトポスの素描である。

第二章 「ニセモノ」ビジネスの光景

本章はこうした日本制作のマンガ・アニメーション・テレビ映画ドラマ作品がアジアを中心とした海外において違法にコピーされ、販売されている現状を、各地のアジア系食品ストア、レンタルビデオ・VCD・DVD店、市場、路上などの実地踏査によって報告している。論者はこうした体験的なルポルタージュを周辺領域の「知的財産権の侵害を糾弾するためでなく、複製による異文化受容の力学」を論じるためのフィールドワークと位置づけている。

第三章 オタク文化と複製の物語

『下妻物語』は、登場人物のロリータとヤンキーのファッション性が、共同体的価値とは異なる「オタク」系の価値観として共有されていく友情の物語であるとし、「2ちゃんねる」の投稿から創作された『電車男』は、共同体の外の「系」としての同質性を相互が発見する恋愛の物語であるとして、両作品ともに「オタク」という志向性や行動様式が人物造形の鍵になっていると論じている。

第四章 資料

本章では、朝日新聞2008年1月に8回にわたって連載された「「ニセモノ社会」の「旅」」の記事を要約し、現代の情報社会におけるニセモノの持つ特質について言及した後、「関連小年表」として、1996年から2008年までの「メディアおよび本調査関連事項」、「アキバおよびサブカルチャー関連事項」、「文化社会一般事項」の3項目に分けて、関連記事を年表化している。また、「補注」に、「関連新聞雑誌記事 資料データベース」として、1997年11月から2008年3月までの朝日新聞東京版から記事を要約して、掲出している。

資料編（別冊）

映画・テレビドラマ 原作文芸データブック

20世紀メディア年表 付録——図録『時をかける少女』商品等

本編は本論文の基礎データとして、120名の原作小説の作者紹介、映像化作品リスト（作品名・上演日時・会社・監督・出演者）、原作小説書誌データ、映像化用の宣伝コピーが載る本の帯、映像と文芸の批評・研究用語集（「映像と文芸のキーワード」）を掲載している。

また、「20世紀メディア年表」として、「写真・映画・アニメーション」・「通信機器・ラジオ・テレビ・コンピュータ・ゲーム」・「文芸・図書・出版」・「漫画・芸能・サブカルチャー」の各メディア略年表を掲載している。

また、付録として『時をかける少女』の小説本カバー、映画ポスター等の図版を収録している。

論文審査の結果の要旨

本論文はテキスト論の立場から、物語論をふまえながら、メディアミックスの現状を作品に即して捉え、メディア市場で流通していく様相に光を当てようというものであり、一貫した方法意識に貫かれている。このことによって、小説から映画への大衆娯楽の移動、さらに集団的享受から個人所有という現代のメディア環境の変化を照らし出すことに成功している。文芸と映像の両者を複眼的に捉えようという本論文の意図は実現されている。

従来の日本近代文学研究は概して文化的教養を持つ高学歴の男性エリートが上中流階級の読者のために書いた文学を対象としてきた。これに対して、本論文が考察の対象としたのは、芥川龍之介を除けば、主として、ライトノベル、少年少女小説、大衆娯楽映画、探偵小説と呼ばれる分野に属し、女性、低年齢層を含む幅広い享受層を想定した作品群である。あえてこれらをクローズアップし、ここに比重をかけながら総体的に論究し、新たな光を当てたところに、本論文の特色と領域開拓的な意義がある。違法コピーなど、現代複製文化の多面的な実態を、倫理的、文化ヒエラルキー的な評価で切り捨てることなく、冷静に問題領域として取り出している点なども、従来の研究視覚にとらわれない本論文の方法が有効に機能した例である。

また、筒井康隆『時をかける少女』の諸論に見られるように、「SF」、「読者」、「続編」、「文化」、「語り」、「少女」、「脱構築」などの独自の観点を駆使した切り込み、欧米の文学文化理論の積極的な援用も大きな特色である。

全体として書籍から映画、さらにはビデオ・DVDとメディアが多様化していくに伴い、享受層がより拡大していく様相を、また享受形態の個人化によって周縁に位置していた人々の欲望が新たに意識化され、物語の更新を促していく機構を、現代日本の社会文化状況に即して捉えた点が評価できる。また、新たに生み出される物語がその度に消費資本主義に回収され、商品となっていく過程が注視されていることは、考察を立体的なものにしている。

一方でこうした研究方法の独自性、開拓性ゆえに持つ、次のような問題点も指摘しなければならない。本論文において展開されたテキスト論的な立場、また「パッケージ」、「構造」、「表象」といった理論的概念が、本論文の立場から十分に説明されているわけではない。理論的応用が必ずしも説得的でない場合もある。近代文学研究、メディア研究の先行研究との関連についても言及が乏しく、新領域の意欲的な模索であるからこそ、もう少し明示的な説明が欲しい。個別の論で言えば、横溝正史『金田一耕助シリーズ』の分析が『時をかける少女』の研究に比して手薄であり、代表作に関するメディアミックスの検討がなお必要である。

以上のような問題点はあるが、本論文は新鮮な研究領域を具体的な分析を通して開示し、文学、文化研究に意義ある貢献をするものとして評価できる。よって、審査委員一同は一致して、本論文が「博士（文学）」（乙）の学位を授与するに値するものであると認定した。

博士学位論文審査報告

題目	近世開版古往来の研究－『新撰遊覚往来』をめぐって－		
氏名	具香（学籍番号 211K4101）		
論文審査委員	主査	江藤茂博	本学文学部教授
	副査	森野崇	本学文学部教授
	副査	木村義之	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター教授
	副査	家井眞	本学文学部教授

論文内容の要旨

近世に入ってその内容が多様化していく往来物のなかで、具香「近世開版古往来の研究－『新撰遊覚往来』をめぐって－」では、「庭訓往来系統」として位置づけられた『新撰遊覚往来』を主たる研究対象としている。その諸本に見られる語彙の特徴、語彙の使用頻度による内容の変化の調査分析と、『異制庭訓往来』との比較による両書の内容をめぐる結びつきの深さに関する「緊密度」および両書の構成要素に関する「類似度」を検証し、さらに『庭訓往来』『異制庭訓往来』『新撰類聚往来』との比較考察による「語彙使用の実態」を検証する。そのことで近世に版本として流通した往来物の実態を論証すること、さらに背景である近世の教育文化についての様相を手に入れることが本論文の目的となっている。

本論の構成は以下の通りである。

目次

序章

一、本研究の目的と意義	1
二、「往来物」に関する先行研究	3
三、研究方法と論文の構成	4

第一章 往来物の誕生と諸相

一、往来物とは	6
二、往来物の性格について	7
三、本稿で扱う「庭訓往来型」と先行研究における「古往来」の分類について	8
四、本稿で扱う「庭訓往来型」と近世出版の「古往来」について	14

第二章 『新撰遊覚往来』考

第一節 『新撰遊覚往来』の諸相	17
一、『新撰遊覚往来』とは	17
二、『新撰遊覚往来』の諸本の紹介	17
三、『新撰遊覚往来』の書名	19
第二節 『新撰遊覚往来』の本文の比較	26
一、古写本と版本の比較	29
二、近世刊本と近代写本の異同	29
三、諸本に見られる日付の異同	36
第三節 『新撰遊覚往来』に見る増補について	50
一、寛文本と謙堂本の分量について	54
二、諸本の分量についての比較	58
三、諸本の分量の統計	64
第四節 『新撰遊覚往来』の誤写・誤刻現象について	69
一、誤刻箇所分析	69
二、誤刻箇所の統計	95
第五節 『新撰遊覚往来』の特殊な語彙について	98
一、特殊の表記	98
二、「鬱」を構成要素とする用語	108
第六節 『新撰遊覚往来』における漢字表記について	111
一、寛文本と謙堂本の漢字表記の異同箇所	111
二、諸本の漢字表記の比較	129
三、諸本の漢字表記の性格	135
第七節 傍訓からみた『新撰遊覚往来』	140
一、読みの異同箇所の分析	140
二、異同箇所の統計	153

第三章 『新撰遊覚往来』と『異制庭訓往来』の比較

第一節 『異制庭訓往来』について	156
第二節 二種の往来に見られる親子関係	159
一、構成面の類似性	159
二、集团的に列举した重要語彙	162
三、文章上の相似点	164
四、月排列の順序	169
第四章 庭訓往来型往来の比較	
第一節 庭訓往来型往来とは	173
第二節 庭訓往来型往来の語彙について	174
一、語彙の種類	174
二、語彙数の統計	178
第三節 庭訓往来型往来の特徴	183
一、書名の繋がり	183
二、庭訓往来型往来の共通点	184
三、各々の特殊性	187
終章	
一、本稿の調査結果	188
二、『新撰遊覚往来』の諸本の系統関係	189
三、『新撰遊覚往来』の性格	192
四、庭訓往来型往来の位置付け	196
五、残された課題	198
参考文献	204

本稿の資料編 1 (『新撰遊覚往来』の寛文本の翻字本文)

本稿の資料編 2 (『新撰遊覚往来』の寛文本と謙堂本の異同箇所の一覧)

初出一覧

「第一章 往来物の誕生と諸相」では、石川謙や石川松太郎そして三保サト子の先行研究で示された「古往来」の翻刻・評価・分類等に従いながら、「往来物」総体の庶民教育における影響力の高さを確認している。さらに書簡形式で語彙や知識の習得を目的とする「庭訓往来型往来」が、版が重ねられたその内実として、「尚古主義・規範意識」があっ

たことも指摘する。その結果、「庭訓往来型」が「古往来」から「近世往来」への「橋渡し」としての役割を果たしていることの重要性をここでは確認している。

「第二章 『新撰遊覚往来』考」では、『新撰遊覚往来』の諸本を取り上げ、書名・構成・内容等について紹介、本文の比較を詳細に行っている。さらに、古写本と版本の『新撰遊覚往来』の増補の有無等といった本文の異同に関して検証し、その文化的背景を考察している。ここでは、諸本の関係及び増補による新しい時代の要求に適応していく『新撰遊覚往来』の教科書としての性格が明らかになった。さらに具体的には、教科書としての『新撰遊覚往来』の性格を把握するために、『新撰遊覚往来』に見られる誤写・誤刻現象の諸本における実態を調査している。そこから、「誤刻箇所を推測し、ひいては江戸期の版本と原型との違いや誤刻が生じた理由」を考察している。また、『新撰遊覚往来』の特殊な語彙や漢字表記の多様性に注目し、漢字表記の変遷過程を詳しく分析している。ここでは、『運歩色葉集』『恵空編節用集』『下学集』『書言字考節用集』『女節用集文字義』などの古辞書類と照合し、その表記の性格を調べ、「音読みが好まれた」当時の「新しい読者の誕生、読者層の拡大」に重なる表記意識の一端を明らかにした。さらに、傍訓から見た『新撰遊覚往来』として、寛文本の総ルビと、諸本九本の傍訓とを比較分析し、江戸期の刊本の漢文の読まれ方をも明確にしている。

「第三章 『新撰遊覚往来』と『異制庭訓往来』の比較」では、多くの共通する題材、部門、語群を内包し、きわめて近い関係にあるとされる南北朝期のこの二つの「往来物」を比較する。具体的には、二種の往来に見出される、①文章中の語の列挙の仕方などの構成上の類似性、②集団的に列挙した重要語彙の数、③語の列挙部分に見られる文章上の相差点、④往復書簡の月配列の順序、の四点に関して比較調査を行っている。そのことで、「『新撰遊覚往来』を母胎としてそこから『異制庭訓往来』が生まれ出たことを証明」している。

「第四章 庭訓往来型往来物について」では、再度「この型の往来物は古往来の消息文体の形を取りながら、単語と百科的知識とを教えるのが主意の教科書」と確認して、五種の「庭訓往来型往来物」を指摘し、そこから『快言抄』を除く『新撰遊覚往来』『異制庭訓往来』『庭訓往来』『新撰類聚往来』の四つを取り上げ、表題、語彙、語彙数、編纂方式等の多くの共通性とそれぞれの特徴について調査分析している。この比較のための分類、「仏教」「文学」「教養」「衣食住」「漢学」「職分職業」「武具」「人倫」「神祇」「地名」「自然」「雑」「その他」という区分は、先行する石川謙の語彙分類に従っている。そこから、「庭訓往来型往来物」については「衣食住に関する語彙が圧倒的に多い」こと、近世に出版された「古往来物」として、「実生活の基盤」となる知識が当時の教科書として求められていたことを明らかにしている。

特に「資料編」として、「寛文二年刊行本の翻字本文」と「謙堂文庫本と寛文二年本との異同箇所の一覧」が付されていて、今後の「往来物」研究の基礎資料として広く研究者がこの「資料」を活用することになるだろう。

本論文では、『新撰遊覚往来』を主な研究対象とし、先行研究と資料調査を丹念に重ねることで、構成や内容の増補および使用語彙やその表記などに関する多角的な調査と分析が行われることになった。その結果、『新撰遊覚往来』の特徴である表記の多様さが改めて認識でき、当時の庶民の表記意識のありようといったものにまで迫り得ている。また、『異制庭訓往来』『庭訓往来』『新撰類聚往来』などの中世から近世に版が重ねられた「庭訓往来型」に見られる「規範意識の強さ」という特徴についても、丹念な比較分析によって明示している。さらに、こうした近世の「古往来」のテキストの諸相だけでなく、その異本流通によって江戸期の教育の実態にも言及することができる。

論文審査の結果の要旨

論文「近世開版古往来の研究－『新撰遊覚往来』をめぐって－」は、その核となる部分としては、「近世古往来物」のうち『新撰遊覚往来』を取り上げて、その諸本の比較検証、内容増補の有無、誤写・誤刻現象、語彙・表記の異同、漢字表記の多様性などを丹念に調査分析した論考である。その方法は、広く教育史的な視座に加えて、語彙の計量的な分析によって、教科書としての機能を明らかにしようとした、国語教育の立場からの論という点に特色がある。

まず「庭訓往来型往来」に研究の焦点を絞っているが、これはこの往来の代表的な作品『庭訓往来』に関する研究はすでに構築されており、論者はそれら先行研究の成果を十分に踏まえたうえで、これまで言及されることのなかった同往来系列の『新撰遊覚往来』に注目したのである。

具体的には、『庭訓往来』研究の構成や内容による諸本の分類という分析方法に重ねながら、『新撰遊覚往来』の「構成・内容・諸本」の紹介と分類から始めている。特に伝本の十五冊を、「古写本」「近世刊行本」「近世・近代写本」に分けて紹介し、研究の前提となるテキストを全て用意するという周到さで分析に臨んでいる研究姿勢は高く評価したい。

特に『新撰遊覚往来』本文の比較として、古写本の「謙堂本」と寛文年間版本の「安田本」を取り上げている。この分析に関しても、「寛文本」の「翻字本文」を作成、さらに異同箇所一覧も作成して、資料編に置いている。この翻刻作業は、論の前提となる作業であり、また基本的な資料としての価値も高い。そうした作業を踏まえて、古写本と版本の二つの「系」の比較という目論みを持つことで、二つのテキストの異同を論者は確認している。さらにその結果として、寛文年間版本「安田本」の「誤刻の多さ」を指摘しながら、諸本におけるそれらの「誤刻」箇所の異同を根拠に、諸本相互の関係を「推測」している。

また、『新撰遊覚往来』への視点として、『異制庭訓往来』との構成および語彙の比較、文章の比較という実証的な作業によって、この二つの「往来物」の関係が、『新撰遊覚往来』から新しい『異制庭訓往来』が生まれた」と推論していく論証性にも一定の評価が与えられた。

さらに実証的な作業の構築は、審査員が同じく評価するところで、『新撰遊覚往来』『異制庭訓往来』『庭訓往来』『新撰類聚往来』との「部門別の語彙」の比較は、さらに論者の丁寧な実証的研究態度を示すものと言えるだろう。

この論考だけで、近世の教育文化が明瞭化されるとはいえないが、そこに向けての労力は示されている。また、そうした問題意識への第一歩として、本論は価値を持つものである。特に、資料による論証への努力は、今後の研究者が参考にすべきものが見られ、審査員が共通して評価した点である。

以上のように、「古往来物」の研究として新しい視点を提出し、さらに論者が意識した往来物の変容過程の一部を明らかにし、研究に新たな知見を提出した意義を、審査員は一致して認め、「博士（文学）」（甲）の学位授与に値するものと認める。

博士学位論文要旨集

内容の要旨および審査の結果の要旨

第 18 集

平成26 (2014) 年 3 月 25 日

発行 二松學舎大学大学院

編集 二松學舎大学 教学事務部 教学課

〒102-8336 東京都千代田区三番町 6 番地16

電話 03 (3261) 7406